Forex

株式会社　ジャパン
エコノミックパルス
〒103-0007
東京都中央区日本橋浜町
2-33-5
Tel 03-5962-3910
Fax 03-5962-3913
www.j-pulse.co.jp
info@j-pulse.info

Market Insight
2026年11月24日（火）

全般ドルと円の底堅さ、持続と調整にらむ

AI株、米日の指標と中銀政策、原油など焦点

今週の為替相場は全般的なドルと円の底堅さについて、持続性と逆方向への調整をにらんだ展開となる。週間予想はドル/円が157.80－160.50円、ユーロ/円が172.20－175.80円。前週は米国発のAI株安と世界株安が安全逃避通貨であるドルと円を支援したほか、米FRB幹部の利上げ前向き発言などがドル高を後押しさせた。ドル高・非ドル通貨安により、クロス円取引では対円で非ドル通貨が連れ安になっている（円は上昇）。今週はAI株や米日の経済指標と中銀政策、原油相場などが焦点になる。

AI株の動向とリスク選好・リスク回避などにらむ

今週の為替相場で注目されるのは、米国のAI株と日本株を含めた世界株の動向だ。11月上旬の米国・中間選挙以降は米AI株の主導で世界株が急落となり、為替相場では安全逃避通貨であるドルや円に上昇の圧力が掛かっている。ドルは米国マネーの国際分散投資からの本国回帰（米株急落によるリスクテイク余力減退や損失の穴埋めなど）や、米国のAI企業アンソロピックによる大型の新規株式上場と、関連した海外からの投資マネーのドル調達需要などがドル高につながっている。

さらに前週までのAI株急落は、米FRBによる利上げ回数の増加観測も影響した。この点もドル高の要因となっている。円は安全逃避による円高のほか、対ドルでの非ドル通貨下落により、クロス円取引で非ドル通貨が連れ安になっている（円は上昇）。その他、クロス円を中心とした円高の要因としては、リスク回避による円調達・グローバル資産投資の巻き戻しや、日銀の12月を含めた利上げ継続観測、米イラン緊張の緩和などによる原油安、日本の当局による円安阻止介入への警戒感などが影響している。

一方で週明け23日の米国株市場では、米AI半導体大手エヌビディアのジェンスン・フアン氏が最高経営責任者（CEO）に復帰するという株高材料が出てきた。23日から24日アジア市場にかけては、米AI株が牽引する形で世界的に株価が急反発となっている。米国の株高がドルを下支えする一方、円はリスク選好などにより、ドル/円とクロス円で円安や円高抑制が見られている。

今週は米AI株の根強い不安定さ警戒などで、基本的なドル高と対ドルでの非ドル通貨安、対円での非ドル通貨の連れ安（クロス円で円高）、ドル/円はドル高と円高の綱引きによるレンジ横這い化といった流れが持続となるか。反対にリスク回避の一服で、ドル安・非ドル通貨反発と対円での非ドル通貨連れ高（クロス円で円安）、ドル/円はドル安と円安の綱引きによる横這い持続、あるいはリスク選好によるドル/円、クロス円での全般円安が優勢になるか。日々、相場の動向と方向性を見極める展開となる。

目先のクロス円を中心とした円高材料としては、以下のような要因がある。

■　AI株を始めとした先行き不透明感の残存と安全逃避の円需要＝2020年以降は広範な通貨に対し、大幅な円安が進展。その分だけ現状からの市場混乱で

WARNING! 記事並びに情報はすべて株式会社ジャパンエコノミックパルスに帰属しています。無断転載及び転送は法的に罰せられますのでご注意ください。

〒103-0007 東京都中央区日本橋浜町2-33-5 マリオン浜町ビル
TEL (03) 5962-3910　FAX (03) 5962-3913
E-Mail info@j-pulse.co.jp　URL http://www.j-pulse.co.jp
発行責任者：上坂　郁　　編集長：原田　祥二

は、他通貨との相対比較で下落余地が限られる。円高の余地と伸びシロに大きさ。他通貨は下落余地が残る。これまで安全逃避の受け皿になってきた金などの貴金属は、金利が付かないため、米FRBの利上げ加速観測で需要が減退。

■　日銀の利上げ余地残存＝他中銀に対して利上げが遅れており、その分だけ利上げ余地が残る。

■　米イランの緊張緩和等による原油反落＝3月以降は原油高が円安の一因に。資源輸入国である日本の輸入増と貿易赤字増や、米国など海外でのインフレ上昇と利上げ強化観測、日本比での海外金利の上振れ思惑（＝内外金利差拡大）など。足元は原油が反落しており、円安の圧力が減退。

■　日本国債の金利上昇と価格下落の一服＝9月にかけての国債安と円安が一服。世界的な安全逃避と国債への資金回帰や、日本での資源高・インフレ上昇の懸念緩和、日銀の利上げペースアップとインフレ「後手対応」懸念の後退などが国債価格をサポート。

一方で中長期スパンでは、現在も「構造円安」の要因が多く残されたままとなっている。目先は短期的な円高の要因と、中長期スパンでの円安要因との綱引きも注視されそうだ。その他の注目点は以下。

＜ドル/円、週足テクニカルで下限抵抗線の攻防＞

為替相場のドル/円は週足テクニカルで、昨春以降のドルの複数下値抵抗線について、上下動を経ながらも上抜け維持や回復ができるか。完全に下抜けていくかの攻防が続いている。

ブルームバーグのレートによると、前週末11月20日時点における下値抵抗ラインの数値は以下のようになっている。26週移動平均線159.11円、40週移動平均線158.81円、週足・一目均衡表の基準線158.44円、52週移動平均線158.22円、週足・一目均衡表の転換線158.14円、13週移動平均線157.67円、週足・一目均衡表の雲上限（先行スパン1）157.15円（今週も157.15円）、75週移動平均線155.41円など。

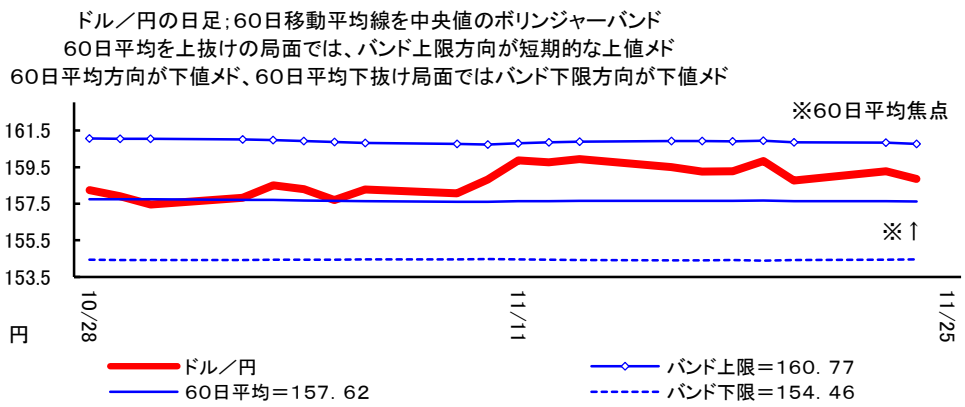
＜米国の指標とFRB政策＞

今週の為替相場で注目されるのは、米国の経済指標とFRBの金融政策動向だ。米国の先物市場によると、週明け23日時点でFRBの12月利上げ確率は96%となり、20日の89%から上昇となった。来年1月の利上げ確率は63%で、20日の51%から上昇している。

今週以降は米国の指標やFRB幹部発言により、利上げ「織り込み余力」が残されている来年1月や3月に関して、利上げ確率が高まると全般ドル高が後押しされる。反対に利上げ確率が低下すると、全般ドル安に振れやすい。

ただし、先行きの利上げ確率が低下となる場合、米国株にはプラスとなる。為替相場ではリスク選好が円高抑制や円安の要因となるほか、ドル安と非ドル通貨高、クロス円取引での非ドル通貨の連れ高（円は下落）などが焦点になりそうだ。

注目はFRBがインフレ指標で重要している25日のPCEデフレーターとなる（個人

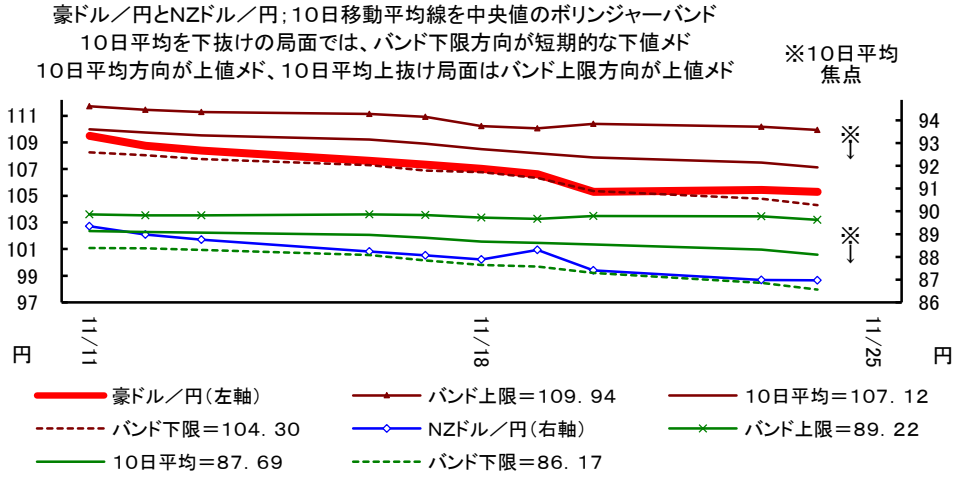


消費支出の価格指数）。3月以降の資源高の遅行効果や、AI･半導体関連の価格上昇、人手不足や小売・サービス関連の需要底堅さなどにより、物価指標は上振れが注目されやすい。ただし、前週までの物価指標の上昇により、一定の上振れは織り込みも進んでいる。

＜日本の指標と日銀政策＞

今週の為替相場で注目されるのは、日本の経済指標と日銀の金融政策動向だ。27日には東京都区部の最新11月コアCPI（生鮮食品を除く消費者物価指数）が公表される。基本的には政府による物価押し下げ策の縮小などより、上振れが注視されそうだ。日銀の12月利上げや、その後の利上げペース加速の観測を高め、全般円高の要因となる。

日本では先行き物価抑制策の縮小のほか、米イラン紛争による資源・商品相場の遅行影響などで、物価は再上昇の可能性がある。日銀による最新10月の企業物価指数は、前年比＋7.1%の大幅上昇となっていた。これから川下のCPIに上振れが遅行波及していく場合、物価上昇比での金利の低さという実質金利の再低下（名目金利－期待インフレ率や物価変動率）のほか、物価上昇比での日銀の利上げ対応の遅れ懸念などにより、円安要因となる潜在余地も残されている。



お客様は、本レポートに表示されている情報をお客様自身のためにのみご利用するものとし、第三者への提供、再配信を行うこと、独自に加工すること、複写もしくは加工したものを第三者に譲渡または使用させることは出来ません。情報の内容については万全を期しておりますが、その内容を保証するものではありません。また、これらの情報によって生じたいかなる損害についても、当社および本情報提供者は一切の責任を負いません。本レポートの内容は、投資一般に関する情報の提供を目的としたものであり、勧誘を目的としたものではありません。投資にあたっての最終判断はお客様ご自身でお願いします。